

近代被覆の作法

クナー邸の色に見るアドルフ・ロースー

齋藤 亜紀子*

アドルフ・ロース 被覆の原則 色
クナー邸 ゴットフリート・ゼンパー ハンス・ホライン

序論

19世紀末から20世紀初頭にかけてウィーンで活躍した建築家アドルフ・ロース (Adolf Loos, 1870-1933) は、「被覆の原則」と題した論文¹の中で、建築において最も重要なのは被覆材による効果を考えることとした。また彼は、建築材料を偽って用いないことや、装飾からの解放を主張した。本論文では、ロースの実作品の被覆²に着目し、彼が用いた色彩とその素材を通して、彼の実際行った「被覆の原則」を明らかにする。そして、それが歴史的にどのような先進性を持っていたのかを考察する。

第一章 アドルフ・ロース被覆の原則

ロースの述べた「被覆の原則」とは何か、また設計にどのように応用したのか。被覆する素材について、また同時代の被覆についての彼の態度を、『装飾と罪悪』³、『アドルフ・ロース』⁴から検証した。

■ロースの言説に見る被覆

ロースは被覆材の効果について、その材料が重要であると述べている。「空間の目的を充足させる効果は、材料と形態とによって引き出されるのである。」⁵また「被覆の原則」を発展させ、「被覆の法則」を以下のように定義した。「被覆の法則とは、被覆された材料が、当の被覆と間違えられないようにしなければならない、ということである。」⁶そして被覆材について、「構造壁を被覆する仕上材としての自分の役割を明快に見せるのである。」⁷とし、外見においても構造材と区別することを主張した。

■作品への被覆の色

ロースは木部への塗装について、原色が塗られてきた歴史があるとした。加えて「科学的な塗料工業の課題は、まさにこの(自然の)色の調合についての理論をうちたてることである。」⁸とし、塗料も原色が好ましいとした。そして多様な色彩をインテリアに塗装することも彼は肯定した。実作品においては、色を用いた木部への塗装は、白・緑・赤・オレンジ・青・いろいろな色が使われた。「ロースは、あいまいさのない純粋でまじりけのない色だけを使った」⁹とも述べられている。以上からロースの理論と実践は一致していたと言える。木理を表わさない状態で塗装されたものには、少なくともトウヒ材・積層板・羽目板・軟材・安価な材木があった。しかし彼は、原色の塗装は好ましいとした一方で、素材が本来有するありのままも美しいとも述べた。¹⁰

第二章 クナー邸に見る色

ロースが行った被覆の実例として、晩年の1929年に設計した山荘であるクナー邸 (Khuner villa) の被覆を取り上げ、色を切り口に紹介した。ここでは各部屋は現地調査

¹¹により、当時の状態がよく残されているものを取り上げた。以下に二事例だけ報告する。

■夫人の部屋-梁や柱に明るい青が塗られている。造り付けのベッド内部は濃い色の木であり、ベッド内部にある棚は黄色で塗装されている。色が塗られているのは主に梁や柱などのフレームで、その他の木部はニス塗りになっており木目が見える。2010年現在塗られている色は、1959年からと同様のものである。(図3)

■庭師の家-雨戸と車庫の扉には緑色が塗られ、他の鉄部には黒色が塗られている。窓枠とドアは白色である。色の付け方はクナー邸本館と共通する。(図2)

第三章 ペンキ〈被覆の差異〉

第三章では第二章を受けて、クナー邸で彩色の手法として用いられたペンキに着目して、実作品の分析を行った。被覆されるものは、クナー邸においてペンキが塗装された木と鉄とした。以下にクナー邸と他の作品とを比較しながら、それぞれ分析を行った。

■木

梁の中央に継ぎ目が見られるものがあることや、木部の彩色に着目した結果、ロースは“構造”としての梁に視線を向かわせ、表現として色を用いていたと言える。一方で彩色していない木の用途や種類からは、ロースのプライベートとパブリックの区別を明確にする感覚が見てとれた。この区別に関して、ロースは恥じらいの感覚が外部に対して体裁を整えさせていたと述べている。¹²そして「洗練された文化において構成されたこのやっかいな感覚は始原の人間にとってはなじみないものだった。」¹³と述べ、恥じ



図1 クナー邸外観
出典:『adolf loos landhaus khuner am kreuzberg』p14



図2 庭師の家正面立面図
出展:『早稲田大学中谷研究室アドルフ・ロース研究出版ゼミ 2010年度夏期調査報告書』

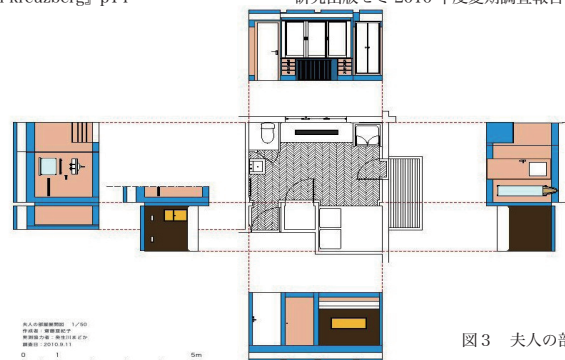


図3 夫人の部屋展開図
筆者作成

The codes of the modern covering

— Adolf Loos through the colors of Khuner villa —

SAITO Akiko, NAKATANI Norihito

らいとは近代人特有の感覚であるとした。以上から、ローズの行った木部への塗装は、「近代人」特有の恥じらいと深く結びついていると言える。

■鉄

窓枠の鉄部には、ファサードに合わせて同じ白色を多く塗っていた。鉄部の色に対する言及は、弟子のクルカ (Heinrich Kulka, 1900-1971) は少数のみしか行わなかった。また、ローズは外観を周囲に習う手法¹⁴を採用していたことから、特別な色は塗っていなかったと考えられる。またローズと同時代の比較として分離派を参照¹⁵し分析を試みた。結果共通して外部の鉄部には緑色が多く使われていた。また、ローズと同時代のオーストリアのシェーンブルン宮殿 (Schloss Schönbrunn) 内の温室 (1882) の外部は緑色であった。一般的に温室は植物のイメージから建築が出来ており、その緑色には植物のイメージが投影されていると言える。そして彼も塗料の色に「自然の色」を使用すべきと発言していることから、それを用いたローズ作品は言説と一致している。以上より、新技術であった鉄が当時持っていた近代のイメージは、ローズを含めた当時の建築家が緑色を共通して使用していたことに見て取れると言える。すなわち、ローズが受けた時代の影響が現れた箇所が鉄部であった。

第四章 石〈被覆の態度〉

再び第二章を受けて、ローズが用いた被覆材である石に着目して分析を行った。特にクナー邸の暖炉から論を進め、ここで実作品における被覆の原理についてまとめた。

■ローズの用いた石

ローズの石に対する感覚は、以下の発言と実作を照らし合わせることで導くことが出来る。「銀行の建物は街の人々にこう語りかけなければならない。「ここにお前の金が、誠実な者達の手のもとに、しっかりと大切に保管されているのだ」と。」¹⁶そして、実作品の銀行を参照した結果、ローズは石に重厚さを感じていたと考えられる。また、ありのままの石が美しいとの発言から、石が持つ模様や色を気に入って用いたと言える。ローズは比較的縞のはっきりとした、色を持つ石を多く用いた。これを第三章と合わせると、石>木 (マホガニー等)>木 (羽目板等) の順で人目につくパブリックな場所に使われていたことが分かった。

■石を使う際のローズの態度

前述の暖炉の設計のドローイングに、ローズは材料の粘板岩の特徴が現れるように被覆する指示を描いた。(図4) 他作品においても木や鉄と比較して、石は特徴が強調されるように用いられていた。前章で分析した木とは、自然の素材を利用するという思想では共通している。しかし、木に対して、石はそのものらしさを人前に出すことを許されたという点で決定的に異なった。木は無垢なものはプライベートな場所に使用されたが、石は固有の特徴がはっきりしたものは逆に人の集まる場所に使われた。

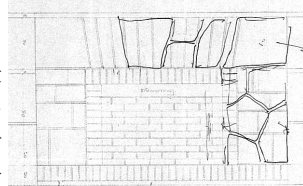


図4 クナー邸暖炉ドローイング
出典：『ADOLF LOOS』p195

■実作品からみるローズの被覆の原則

ローズの被覆の原則では、建築材料を偽って用いないことと共に、素材そのものの価値を如何に認めるかが重要であった。最も素材そのものの持つ形を増幅し示された石こそ、ローズの実際的な被覆の原則が現れたと言える。

第五章 近代被覆の一考察

5-1 ゴットフリート・ゼンパーの被覆

「被覆の原則」とは元々ローズが言い出したことではなく、ゼンパー (Gottfried Semper, 1803-1879) の引用であった。ローズはゼンパーの「織物芸術」を根源的とし、「建築の四要素」¹⁷を引用した発言を残している。しかし、ローズがゼンパーに対して異を唱えている箇所がある。ゼンパーは、パルテノン神殿の白い大理石を被覆される下地としてふさわしいとし¹⁸、さらに素材が表層に剥き出しにされることを否定している¹⁹。しかしローズは手が加えられていない、素材そのものの価値を被覆材に認めている。

5-2 ローズと近代被覆

ゼンパーから一世代を経て、同じく影響を受けているのがオットー・ヴァーグナー (Otto Wagner, 1841-1918) である。ヴァーグナーはゼンパーの理論を批判しつつ進め、ファサードに被覆材を鋳で留めた。しかし一方で、室内において絵を描くための下地として石を用い、石らしさを被覆材として認めることはできなかった。ヴァーグナーや続くホフマンら分離派は、そういった点ではむしろゼンパーに回帰している。ローズが認めたありのままの石の持つ先進性は、ヴァーグナーも持ち得なかったものだった。ゼンパーはウィトルウィウス²⁰を意識し、その後にヴァーグナーが続き、ローズも続いた。そしてローズが認めた石に見られる「被覆の原則」は、現代の建築家ハンス・ホライン (Hans Hollein, 1934-) のシュリン宝石店 1 (1974) のファサードにも見て取れる。

結論

ローズが論考の中で、装飾を取り除くのが人類の目標であるとしたことに対し、装飾なしで剥き出しにされた素材を実作でどう表現したかを考察した。結果、ローズは石が持つ特徴を増幅させるように被覆を行っていたことが分かった。そしてゼンパーとヴァーグナーとの比較から、その素材そのものの価値を増幅させる被覆が、先進性を持っていたことが明らかになった。

謝辞

本研究を書くに当たってご協力をいただいたクナー邸現所有者のシュタイナー氏、安藤忠雄文化財団をはじめ、研究者の方々に厚くお礼申し上げます。

¹ アドルフ・ローズ著 伊藤哲夫訳『装飾と罪悪』(中央公論美術出版 1987) p29 ² 建築構造の表層を覆う化粧材を指す。 ³ 前掲『装飾と罪悪』、ADOLF LOOS『Ins Leere Gesprochen』(Georges Cres et Cie 1921) ⁴ ハイナリヒ・クルカ著 岩下真好、佐藤康則訳『アドルフ・ローズ』(泰流社 1984) ⁵『装飾と罪悪』p30 ⁶ 同 p34 ⁷ 同 p33 ⁸ 同 p44 ⁹『アドルフ・ローズ』p44 ¹⁰ またローズが使用した石材として、緑の大理石・スキロス産の大理石・オニックス・チボリーノ大理石・黒ミカゲ・ピアノコカラ大理石・トラバーチン・粘土板が挙げられる。¹¹2010年度に早稲田大学中谷研究室アドルフ・ローズ研究出版ゼミが行った調査。¹²13『Ins Leere Gesprochen』p98 ¹⁴『装飾と罪悪』p85, 92『アドルフ・ローズ』p21 ¹⁵ カフェ・ニールマイヤー (1898)、オルブリッヒ自邸 (1901) 等のオリジナルのドローイングを参照した。¹⁶『装飾と罪悪』p106 ¹⁷ 大倉三郎著『ゴットフリート・ゼンパーの建築論的研究』(中央公論美術出版 1992) ¹⁸ 川向正人著『ゴットフリート・ゼンパーのポリクロミー観に関する研究』(日本建築学会計画系論文集 2000) ¹⁹ 阿部美由起著『ゴットフリート・ゼンパーの素材概念』(美術 2001) ²⁰ ウィトルウィウス (Marcus Vitruvius Pollio, 生没年不詳)。紀元前1世紀のローマ帝国に活躍した建築家、技術家。『建築十書』を著した。